

聖と俗の境界線上において

— 無住処涅槃 —

佐藤俊哉

一

煩惱を断じて涅槃をめざす声聞乗に対して、菩薩乗は究極の目標であるはずの涅槃にもとどまることはない。衆生を利益するためならば、自ら進んで輪廻の世界に趣く態度がそこに現われているといえよう。そこで今回は瑜伽行唯識派の論書より、同じく涅槃といいつつも、涅槃に安住することのない涅槃である無住処涅槃に焦点をあてながら考察を進めることにする。

この涅槃は一見、涅槃を否定しているかのようにみえ、あるいは矛盾をはらんでいるようにもみえるが、雑染を捨離して生死を捨離しないという涅槃であり、苦悩の世界に趣くといっても、だからといって煩惱によって汚染されてしまうということではない。涅槃に執することはないが、同時に生死に執することもない。衆生は生死に漂い、一方、声聞は涅槃に執するが、ある意味では両者を否定する立場がここにある。『成唯識論』によれば、涅槃について次のように分類して解説する。

涅槃義別略有四種。一本来自性清淨涅槃。謂一切法相真如理。雖有客染而本性淨。具無數量微妙功德。無生無滅湛若虛空。一切有情平等共有。与一切法不一不異。離一切相一切分別。尋思路絕。名言道斷。唯真聖者自内所証。其性本寂。故名涅槃。二有余依涅槃。謂即真如出煩惱障。雖有微苦所依未滅。而障永寂。故名涅槃。三無余依涅槃。謂即真如出生死苦。煩惱既尽。余依亦滅衆苦永寂。故名涅槃。四無住處涅槃。謂即真如出所知障。大悲般若常所輔翼。由斯不住生死涅槃。利樂有情。窮未來際用而常寂。故名涅槃。一切有情皆有初一。二乘無學容有前三。唯我世尊可言具四。⁽¹⁾

涅槃に四種があり、四種とは(一) 本来自性清淨涅槃、(二) 有余依涅槃、(三) 無余依涅槃、(四) 無住處涅槃である。

『成唯識論』は涅槃と菩提の二つの証得を主題としており、菩提は所生得とされて、有為であり、因より生ずるのに対して、涅槃は所顯得として示されており、もとよりあるものが顯わになることをいう。⁽²⁾ 本来自性清淨であり、客塵煩惱によつて覆われているために顯わになることはないが、聖道が生じて、その煩惱を断ずることによつて表面化する。したがつて、『成唯識論』において涅槃について説示する項を「如是所説四涅槃中唯後三種名所顯得」と結ぶように、四種の涅槃の中では後の三者、すなわち有余依涅槃、無余依涅槃、そして無住處涅槃が所顯得とされる。また涅槃は、真如が煩惱を離れることによつて施設したものであり、体は清淨法界であるといふ。

さて、ここで四種の涅槃を順次に示すと次のようになる。(一) 本来自性清淨涅槃とは、一切法の実相である

真如の理であり、客塵煩惱によって覆われているものの本来自性清浄であり、無量の微妙なる功德を具有しており、不生不滅で虚空のごとくである。すべての有情に平等に共有するものの、聖者のみの自内証であり、その性は本来円寂である。(二) 有余依涅槃と(三) 無余依涅槃は、煩惱障を断じて現われる真如であり、身体が残存しているか、それとも、それが残存していないかによって(二)と(三)に分類される。そして(四) 無住処涅槃は、所知障を断じて現われる真如であり、大悲と般若によって輔翼されており、般若によって生死、すなわち輪廻に住することもなく、また大悲によって涅槃に住することもなく、有情を利樂する。輪廻に執することがなく、かつ涅槃にも執することのない涅槃を無住処涅槃という。なお、このように涅槃を四種に分類して整理するが、いずれにおいても本質的には真如に他ならず(本来自性清浄涅槃においては真如の理)、有情といえどもそれを有しており、煩惱障を断ずる二乗においては有余依涅槃あるいは無余依涅槃と称され、さらに所知障をも断ずることから無住処涅槃と称されるのである。

二

般若と大悲とは、大乘仏教において中心となるテーマであり、般若によって輪廻に住することはなく、大悲によって涅槃に住することもないと主張する無住処涅槃に関する考察は、般若と大悲とを条件にしながら、輪廻と涅槃という相対する概念をどのように解釈するかという問題でもある。いわば聖と俗の世界を探究することであり、対極化された両者のまさに境界線上を取り扱う微妙な問題であると考えられる。無住処涅槃に関しては、大円鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の四智の中、平等性智について解説するところに取り上げられているので引用することにする。

まず、四智と法界清淨の五法のそれぞれの性格について説く經典に『仏地経』があるが、戒賢は『聖仏地解説』において次のように註釈する。

平等性智は菩薩が現觀の時に自己と他者との平等性智を得て、それを所縁としてさらに上位の勝れた修習地に入り、大慈と大悲と相応し、仏地において無住処涅槃に入る。⁽³⁾

菩薩が現觀の時に自己と他者との平等性を内容とする智を得て、さらに修習することによって円満し、仏地において無住処涅槃に入る。その場合、大慈と大悲との相応も説かれており、智に慈悲を伴って無住処涅槃は成り立つことになる。

次に、同じく『仏地経』を註釈した親光等による『仏地経論』によれば次のようである。

平等性智者。謂觀自他一切平等大慈大悲恒共相応。常無間斷。建立仏地無住涅槃。⁽⁴⁾

『聖仏地解説』と比較して重複する部分があり、大慈と大悲との相応と、仏地における無住処涅槃が説かれているが、一部に異なる箇所が認められる。それは智、すなわち平等性智の内容に関してであり、平等性智の平等とは瑜伽行唯識派の諸論書においては自己と他者との平等を基本とするが、ここでは「自他一切平等」として、自己と他者との平等に加えて、一切の平等が付加されている。

『聖仏地解説』は戒賢単独による著作であるのに対して、『仏地経論』は親光菩薩等とあり、複数の論師に帰

せられる論書である。『仏地経論』の翻訳者は玄奘であり、同じく玄奘によって訳出されて護法等菩薩とあり『仏地経論』と同様に複数の論師を予想させる論書に『成唯識論』がある。訳出された年代を調べると、玄奘は『仏地経論』を翻訳してから『成唯識論』を翻訳しており、親光と護法はいかなる関係にあるのか、また両書を翻訳する態度に果たして相違点はあったのか、といった問題はさておくとして、ここでは『仏地経論』と同じく玄奘によって訳出された『成唯識論』を参照すると次のようにある。

二平等智相応心品。謂此心品觀一切法自他有情悉皆平等。大慈悲等恒共相応。隨諸有情所樂。示現受用身土影像差別。妙觀察智不共所依。無住涅槃之所建立。一味相統窮未來際。⁽⁶⁾

無住処涅槃に関する記述があり、『聖仏地解説』および『仏地経論』に比べて詳しい解説がなされている。先に引用した両論書と同じように、智と慈悲についてふれられており、『仏地経論』では自己と他者との平等と並列して一切の平等が説かれていたが、ここでは自己と他者としての有情との平等はもちろん説かれており、それに加わるかたちで一切法の平等が説かれている。しかも一切法の平等は、平等性智の本来の意味ともいふべき、自己と他者との平等よりも前に位置付けられており、「一切法自他有情悉皆平等」とされている。このことは、ある意味では、何故に自己と他者との平等が成立するかという根拠が示されており、『成唯識論』の特色の一つといってもよからう。すなわち真如を所縁とする無分別智が得られて、そして自己と他者との平等が成り立つということが主張されていると考えられ、玄奘自身に果たしていかほどの構想があったかどうかは充分には測りかねるが、法相唯識の流れをくむ玄奘門下は盛んにその点を強調する。その背景には円測一派の存在を無視するこ

とはできないが、一切法の平等と、自己と他者との平等という二種類の平等観を提示され、しかも、それらの前後の位置付けが一旦なされると、一方の優位性が示されたり、それに引きずられて他方が第二義的に扱われたりする可能性がでてくるように思われる。『成唯識論』によれば、平等性智の所縁は真と俗とであり、性質の異なるものが渾然一体となつている様子を窺うことができるが、矛盾をはらみながらも何とか同一性を保つていたものに、亀裂が入ったり、あるいは序列化が生じたりすることにはならないだろうか。

三

平等性智における平等の内容についてみてきたが、先の引用文にあるように『成唯識論』ではその智を受用身に配当する。仏陀観に法身、報身、応身あるいは法身、応身、化身などの三身説があるが、『成唯識論』は自性身、受用身、變化身の三身説であり、さらに受用身に自受用身と他受用身の二種をあげている。したがって、実質的には三身説というよりも四身説と考へて差し支えないであろう。このように、受用身として二種をあげるにもかかわらず、ここではそのいずれとも特定せず受用身とするのは何故であろうか。新導本によれば、この受用身の脇に註して「他」の文字が入っており、他受用身と解釈しているようである。しかし、『成唯識論』の本文にはそのような文字はなく、単に受用身とあるのみである。

そこで、『成唯識論』では受用身をどのように捉えているかをみていくと次ようにある。

二受用身。此有二種。一自受用。謂諸如来三無數劫。修集無量福慧資糧。所起無辺真実功德。及極円浄常遍色身。相続湛然。尽未来際恒自受用広大法楽。二他受用。謂諸如来由平等智示現。微妙浄功德身。居純浄土。

為住十地諸菩薩衆。現大神通。轉正法輪。決衆疑網。令彼受用大乘法樂。合此二種。名受用身⁽⁸⁾。

受用身に二種があり、自受用身と他受用身とである。そこでまず自受用身とは何かというと、如来が三無数劫において無量の福德と智慧の資糧を修集して生起した真実の功德、および円満な相を備えて衆患を離れ、間斷することなく遍満する色身である。また尽未來際、恒に自ら広大な法樂を受用しており、自ら悟った法を味わう姿が表わされている。菩提樹の下で開悟した仏陀は、期間に種々なる説があるが、しばらくの間、自ら悟った法をかみしめていたとされる。自受用身には仏陀のそのような姿が描き出されていると考えられる。一方、他受用身とは何かというと、如来が平等性智によって示現した微妙な功德身であり、淨土に居して十地の菩薩を利益するために大神通を現わし、法輪を轉じて他に法樂を受用させる。自ら法樂を受用するだけでなく、一轉して他に對しても同様なはたらきかけがなされることが説かれており、それら二つの性格を合わせたものが受用身である。したがって受用身には、自受用身と他受用身との二つの側面があることになり、自受用身の背面にあるものが他受用身であり、両者は離れて存在するというよりも、むしろ紙の表と裏のような関係として捉えた方がより適切ないように思われる。

さて、仏身の本質は智であり、その智であるところの平等性智は、単に受用身として配当されていたが、受用身を自受用身と他受用身の二種に開く場合は、他受用身として解説するところに示されている。平等性智の平等とは、基本的には自己と他者との平等であり、その智を他受用身に配するのは、どちらかといえば利他の側面が前面に打ち出されているためと考えられる。自己の利益のみではなく、他者の利益をも追求する態度がそこに現

われているからであろう。

論曰。從發深固大菩提心。乃至未起順決択識。求住唯識真勝義性。齊此皆是資糧位攝。為趣無上正等菩提。修集種種勝資糧故。為有情故勤求解脫。由此亦名順解脫分。⁽⁹⁾

『成唯識論』では菩提心を起こしてから、四善根位において所取能取を伏除して唯識性に住するためにはわゆる入無相方便觀を行ずる前までを資糧位に配する。そこでは福德と智慧の二資糧を積むいわば自利と、有情のために解脫を求める利他とが説かれている。受用身は、その身を自受用身と他受用身に開いていることから、それら二つが結実した姿として提示されているといつてもよからう。

そこで仏身と自利、利他の関係について『成唯識論』を参照すると次のようにある。

如是三身。雖皆具足無辺功德。而各有異。謂自性身。唯有真實常樂我淨。離諸雜染。衆善所依。無為功德。無色心等差別相用。自受用身。具無量種妙色心等真實功德。若他受用及變化身。唯具無辺似色身等。利樂他用化相功德。又自性身正自利攝。寂靜安樂無動作故。又兼利他為増上緣令諸有情得利樂故。又与受用及變化身為所依止。故俱利攝。自受用身唯屬自利。若他受用及變化身唯屬利他。為他現故。⁽¹⁰⁾

三身の功德について、自性身、自受用身、他受用身と變化身には異なりがあり、順次に無為、真實、化相のそれぞれの功德があるという。そして、自性身に自利と利他との二利があるとするが、そのうちの利他に関しては、

利他を兼ねるとしており、自性身はあくまでも自利であるが、それが増上縁となつて有情に利樂を与えるので利他としての機能も有することになる。また自性身は、受用身と變化身の所依となつており、したがつて自利のみではなく利他の役割をも演じることになる。自性身に動作はないということは、法樂の受用はない、つまり開悟というはたらかはないということであろうか。法樂を受用して、救済活動に入れるのは受用身であり、その意味において自受用身は自利であり、他受用身および變化身は利他である。

ところで、『成唯識論』と同じく受用身を二つに分けて論書に『仏地經論』がある。受用身に自受用身と他受用身の二種があるとして次のようにある。

又自性身寂滅安樂。正屬自利功德所攝。為増上縁益衆生故。兼屬利他。又与二身俱利功德為所依故。二利所攝。受用身者。具有二分。一自受法樂分。謂三無數劫修自利行滿足所証色等實身。令自受用微妙喜樂。二他受法樂分。謂三無數劫修利他行。滿足所証色等化身。為入大地諸菩薩衆。現種種形說種種法。令諸菩薩受大法樂。由此二分。或說此身唯自利攝。或說此身唯利他攝。或說俱攝。皆不相違。⁽¹⁾

受用身は二分を具有しており、自受法樂分と他受法樂分とである。前者は三無數劫にわたり自利行を修して色等の身を満足し、自ら微妙な喜樂を受用する。一方、後者は三無數劫にわたり利他行を修して色等の化身を満足し、入地の菩薩衆のために種々なる形を現わし、種々なる法を説き、かれらに法樂を受けさせる。受用身にはこのような二分があるので、唯自利に攝せられ、あるいは唯利他に攝せられ、あるいは両者を具備するともいうことができ。このように受用身に二面的な性格があるということは、この身は他の二つの身、すなわち自性身と變化身のあ

る意味では中軸をなすと考えることもでき、あるいはまた視座をかえるならば、二つの身の狭間に位置する身といふことができよう。

第二章の註(4)において、無住処涅槃について説く『仏地経論』を引用した際に、『聖仏地解説』と対比させるために後半を割愛したが、『仏地経論』においても、『成唯識論』と同じように平等性智を自受用身とも他受用身とも限定せずに、単に受用身として規定する。その点については、受用身には今まで考察したような背景があるためであり、したがって、『仏地経論』は『成唯識論』と同じ傾向を有する論書といふことができる。しかし、『両論書を比較すると、『仏地経論』における平等とは「自己一切平等」であり、自己と他者との平等が一切の平等よりも前に配されており、相違点も認められる。平等性智における平等とは本来、自己と他者との平等であり、『仏地経論』ではそれに一切の平等が加わっていることになるが、それらの配列は、平等性智の原意ともいふべき自己と他者との平等をあくまでも優先させており、一切の平等はそれに付加されたかたちで提示されている。ところが、『成唯識論』においてはそれらの関係が逆転して「一切法自他有情悉皆平等」であり、自己と他者との平等よりも前に一切法の平等が配されることになる。

両論書とも論主の名は明記されているものの、複数の作者を予想させるために、そのような説を提唱した人物を特定することは容易ではないが、視点を換えるならば、だからこそ翻訳者および翻訳に関わった者たちの意図が論書に反映されているとも考えられ、さらには、思想を継承した者たちがいかに解釈していったかということも含めて考察する必要があると思われる。

無住処涅槃は、涅槃に安住することのない涅槃であり、一見するとつじつまがあわないようにみえる涅槃である。輪廻と涅槃という概念を導入して説明すると理解しやすい場合もあるが、それらは相反する概念であるために、ともすると無住処涅槃の性格を分解してしまう恐れもある。聖なる領域と俗なる領域に二分して、般若と大悲によって二つの領域とどのように関わるかを探ろうとするからである。それは主体性をもって、いかにして聖の領域に踏み入れるか、または俗の領域に踏み入れるか、といった問題であり、涅槃に振れたかと思うと、今度は輪廻に振れ返し、時計の振り子のように二つの領域を揺れ動くようなものである。一方の領域に入ると、相対的にもう一方の領域との関わりは希薄にならざるをえない。しかし、輪廻に住することはなく、涅槃にも住することはないというのは、大切なのは両極端ではないという主張であり、仮に両者の間に線を引くとするならば、まさにそれらの境界線上を歩む姿を表わしている。輪廻と涅槃として説かれているが、本来は一つであるはずのものが、ある時に否定され、否定されたかと思つたならば、今度は再び肯定される。しかし、そのような転換を経たとしても元となるものは同じままである。つまり、突如として未知なる別世界が出現したとしても、その別世界は「元の世界」となら変わることはない。そのような二つの世界があることによって、輪廻と涅槃の不二ということが成り立つと考えられる。

註

(1) 新導本『成唯識論』卷一〇 九頁～一〇頁 法隆寺 昭和

五〇年

(2) 深浦正文『唯識学研究 下巻 教史論』永田文昌堂 七一

八頁～七二三頁 昭和五年

(3) 『聖仏地解説』(西尾京雄『仏地経論之研究』第一巻 六〇

- 頁 国書刊行会 一九八二年)
- (4) 『仏地経論』卷三(大正蔵二六 三〇二頁a)
- (5) 新導本『成唯識論』卷一〇 一四頁 法隆寺 昭和五〇年
- (6) 拙稿「法相唯識における見道の構造」密教学研究 第三二号 平成一二年
- (7) 智山教学大会に際して、廣澤隆之先生より平等性智は他受用身か否かの御教示を受けた。示唆に富む御質問に対して、この場を借りて謝意を表する次第である。
- (8) 新導本『成唯識論』卷一〇 二五頁〜二六頁 法隆寺 昭和五〇年
- (9) 新導本『成唯識論』卷九 五頁 法隆寺 昭和五〇年
- (10) 新導本『成唯識論』卷一〇 二九頁 法隆寺 昭和五〇年
- (11) 『仏地経論』卷七(大正蔵二六 三三七頁b)
- 〈キーワード〉 瑜伽行唯識派、無住処涅槃、平等性智、受用身